

大学の『国際化拠点整備事業 (グローバル30)』実施に向けて

大学副学長・国際連携推進機構長 黒 木 保 博

今年度の国際化拠点整備事業(グローバル30)の採択拠点が発表され、同志社大学が選ばれた。申請校22校の中から13校(国立7、私立6)が決定した。選定大学は、国立の東北、筑波、東京、名古屋、京都、大阪、九州、私立が同志社、早稲田、慶應、上智、明治、立命館である。今後5年間の補助金事業であるが、その後も大学独自の継続事業となり、2020年までに全国で留学生受入30万人を最終到達目標とする計画である。

すでに大学は、留学生別科(1999)、国際連携推進機構(2006)、日本語・日本文化教育センター(2006)等の設置をして、国際化にむけた着実な基盤整備を進めてきていたが、今回の採択により、これを加速化・充実拡大化させることになった。

グローバル30のねらい

今回の事業のねらいは、わが国の高等教育の国際競争力の強化、各大学の機能に応じた質の高い教育を実施し、留学生等に

魅力的な水準の教育等を提供すること、留学生との切磋琢磨する環境の中で国際的に活躍できる高度な人材の養成を図ること、そのために日本に留学しやすい環境を提供する国際化拠点の形成をするということである。

申請条件

このために、科学研究費補助金採択件数、修士・博士学位授与数、留学生受入数の平均が全て日本の大学平均値の2倍以上であることや、海外事務所設置の既設等が申請条件として課せられた。かつ申請計画には、留学生受入最終目標値が現在数から最低1,000人以上増加し、到達数2,600人以上、外国人数員比率が10%以上となる目標値が求められた。

具体的事業内容

さらに申請には、次の計画内容の明示が求められた。第一に、英語による授業のみで学位取得できるコース等の設置である。

本学は、人文・社会学部に「国際教育インスティテュート」国際教養コース(2011)、大学院では、ビジネス研究科グローバルMBAコース(2009)、グローバル・スタディーズ研究科(2010)、そして理工・生命医科学研究科の国際科学技術コース(2011)の設置を計画している。

第二には、留学生受入のための環境整備である。本学は、生活支援としての宿舍整備、生活支援アドバイザー設置、経済支援としては奨学金の充実、就学支援としては教育支援コーディネーターや学習・研究支援チュータの配置、かつ日本語・英語ライティングセンターの設置、そして就業支援としては日本ビジネス講座、留学生向けインターンシップの充実を計画している。

第三には、大学全体の国際化推進計画である。これには、事務体制の国際化及び関係文書の英語化、外国人教員の計画的・組織的増員、外部評価制度の導入などを計画している。また、本学学生の派遣留学の促進を計画している。

第四には海外事務所の開設・充実である。すでに台湾・台北市に事務所があるが、イスタンブール、ロンドン、ソウル、上海等に事務所を設置する計画である。

第五には、海外大学との共同プログラム計画が求められた。すでにアメリカのリベラル・アーツのトップ校16校によるAKP、ドイツ・チュービンゲン大学日本語センター、スタンフォード技術革新センター(SCTI)が本学には設置されている。さらにこの9月からはアメリカの有名総合大学14校が加盟するKCJS、イギリス・シェフィールド大学日本語センターが今

出川キャンパスに設置されることになっている。これらの海外有力校のスタディーアブロード・プログラム受入センターを置くことで、日本語・日本文化教育センターとの連携・緊密化を図るとともに、本学学生との交流を活性化し、キャンパスの国際化をより一層推進する計画である。

達成目標

これらの計画を実施することで、2020年までに学位取得目的・交換・別科等の受入留学生数を3,500人、派遣留学生数を1,050人、学生交換協定を大学間・学部間も含めて200校、外国人数員比率11.1%になることをめざしている。では、発表されている他の12校の計画では到達目標値はどうなっているのだろうか。ほとんどの大学が受入人数3,000人から4,000人台、また派遣数も1,000人台である。このことから本学の到達目標は突出したものではないということが理解できるであろう。

国際化がめざすもの

国際化がめざす未来像は、世界中から学生・教職員が集まる大学、世界中に学生・教職員を派遣できる知の国際化拠点になることである。これは本学の教育理念「国際主義」の現代的実質化であり、進取の気風に溢れ、良心に従って行動する国際人の輩出をめざすことになる。

今出川に戻ってきた1・2年次生 — 神学部と統合教育 —

大学神学部長 水谷 誠

京田辺の四半世紀

京田辺キャンパスで1・2年次生が授業を受け出したのは1986年4月のことであった。それから23年を経たこの4月に神学部と社会学部の1・2年次生が今出川キャンパスに戻ってきた。23年前に1年次生であった人々はもう40歳を過ぎているのだから、時間の過ぎ行くさまには驚かされる。これで、今出川（新町）を拠点として設立された政策学部と合わせて、三つの学部の学生諸君が今出川で統合教育を受けることになった。

（京）田辺のキャンパスは、当初は植樹された樹木も繁茂しておらず、掴みがたい茫洋な印象を学生諸君に与えたかもしれない。しかし、時とともに落ち着いた風情を増し加えてきたこの広大なキャンパスはノンビリとした雰囲気を感じだし、神学部の学生諸君もまた、長い坂道を登り降りする生活に慣れ親しむようになったと思われる。

しかし、同一学部が二つのキャンパスで教育活動に従事する

ことに伴う全学的な、一般的な問題とともに、小数の学生で構成される学部特有の問題を抱えながらの四半世紀であったように思う。伝え聞きであるが、神学部の学生に出会うことができればその日に何か良いことが起こる？という必ずしもキリスト教的とは言えない言い回しがキャンパスに広がっているという。そのように思ってもらえるのはありがたいことではあるが、これは、他学部生だけでなく神学部生相互の関係にもあてはまることであった。

京田辺の広大なキャンパスでは、学部の同僚学生を授業中に見ることはあっても、その場を離れると、たとえサークルに入っているにしても、日常の学生生活の中で自分の学部の学生を見ることは稀であった。言わば大海原の中に隠れ、消え去るように、神学部で学んでいるということのアイデンティティが希薄になり、その求心力が弱くなっていくこともまた起こり得たのである。

統合教育とその可能性

このたび、他の人文・社会学系学部群の今出川帰還に先駆けて実施された今出川校地での統合教育体制によって、従来の2校地体制によって生じていた種々の課題に対応し、克服していく環境が我々に与えられたと言える。これを具体的に実行していくためには、単なる教学面、学生サービス面での体制の点検にとどまらず、学生諸君の直接の交流によって生じる仲間意識の醸成と同時に互いに切磋琢磨する関係、またそれによる相乗効果を活かす総合的な体制の構築が求められている。

ともあれ、教員の活動拠点である研究室が今出川キャンパスにある神学部や待辰館に置かれていたことにより、1・2年次生と教員との距離を大幅に縮めることができるだろう。これまでは、小さな学部であるにもかかわらず、京田辺の授業



始業礼拝（大学神学館礼拝堂 2009.4）

とあわせて、教員の活動拠点である研究室が今出川キャンパスにある神学部や待辰館に置かれていたことにより、1・2年次生と教員との距離を大幅に縮めることができるだろう。これまでは、小さな学部であるにもかかわらず、京田辺の授業

を担当していない教員と新入生の意志の疎通は困難であった。今後は、日常的な接触をとおして種々のサポートを学生諸君に提供していくことが可能になる。学生諸君相互の交流についてはすでに、1年次生を対象にした導入教育である一泊キャンプを、毎年、北小松にある同志社びわこリトリートセンターで開催しており、そのプログラムの中核に学部上級生のリーダーが活躍する仕組みができています。SA（スチューデント・アシスタント）制度による学部学生間のコミュニケーションの深まりや、TA（ティーチング・アシスタント）制度による大学院生と学部生の交流も生じている。

このようなものを活かしつつ、さらに、自然発生的な次元で学生諸君同士の相互交流を活性化し、相互に刺激しあうダイナミックな環境を醸成していかなければならない。今出川には学部だけでなく、大学院の前期課程、後期課程が置かれている。その中には社会人経験のある人々、親子、時に親子以上の年齢差を持つ人々も多く学んでいる。正門近くの神学館を中心にして学部この今出川キャンパスでは、同一学年の横の関係がこれまでに以上に積極的な構築が容易に構築されていくであろうし、それだけでなく異なる学年に在籍する者相互が、また学部生と大学院生、世代の異なる人々が交流する縦の関係も活発に生じてくることを期待することができるのである。

現在、学部教育の質の問い直しを文科省は求めているが、この要請を待つまでもなく、同志社は、人ひとりを大切にしたい人方を教育の基にしていることを再確認しつつ歩んでいきたいと考えている。

完成年度を終えた社会学部の新たな船出 —履修キャンパスの統合と社会学部の教育—

大学社会学部教授 井上 智 義

大きく若返った新町キャンパス

2009年4月、新町キャンパスには、若い活気が満ち溢れ、その雰囲気は大きく変化しました。と言っても、新町キャンパスに新たな建物が建ったわけではありません。教職員の平均年齢が大きく若返ったわけでもありません。そうです。入学してきたばかりの1年次生と昨年度に入学した2年次生が、この4月から、大学院生や3年次生以上の学生に混じって日常的に新町キャンパスで、学生生活を送ることになったのです。

今年3月、社会学部は412人の卒業生を初めて世に送り出しました。大学は4年で卒業するのが原則ですから、4年前に同志社大学社会学部に入学した人たちの大半は、4年間を同志社で過ごし、その学びの成果と数々の想い出を胸に、巣立っていったこととなります。「4年間を同志社で過ごし」と一言で片付けましたが、実際には、彼らは京田辺校地と今出川校地の2校地で、学生生活を送ったこととなります。

4年間を新町キャンパスで過ごす

今年度新たに社会学部に入学した学生と、3月に卒業した社



新町キャンパスの食堂風景：食堂の入りきれない学生のために真真館一階の複数の教室とラウンジが昼休みに開放されている。弁当を買い求めキャンパス中庭で昼食をとる学生も多い。

りました。しかし、その接触は限定的で日常的なものではありませんでした。二つ目は、教員と学生が同じキャンパスに居られるようになったことです。必要に応じて、学生は教員の研究室に訪れることが可能でし、顔を合やす機会が格段に増えました。三つ目の良い点は、基本的には2校地を往来する無駄な時間がなくなったことです。

新町キャンパスの施設だけでは不十分

しかし、良いことばかりではありません。困ったことも少なからず起こっています。そのひとつは、いわゆる自然科学系の授業や多様な内容の体育の科目の履修が事実上できなくなった点です。また、京田辺キャンパスで展開されているクラブやサークルなどの課外活動に参加しようにしても、通学定期が発行されないようです。このような学生には、時間的経済的な負担がのしかかります。さらに、京田辺キャンパスの

会学部1期生と大きく異なる点は、彼らは入学したその年から、今出川校地で学生生活を始めていることです。もう少し正確にいうと、4年間を主として新町キャンパスで過ごすこととなります。この新町キャンパスでは、すでに政策学部が開設当初から1年次からの教育を展開していました。ですから、同志社大学にとって、社会学部の履修キャンパスの統合は、何も新しい試みではありません。しかし、その変化を実感しているのは、神学部と並んで、わが社会学部の学生、教職員だと思っています。そこで、この履修キャンパス統合による教育の利点と問題点をまとめてみたいと思います。

統合によって得られたメリット

まず、良いところは3点あると思います。その一つは、学生が先輩たちのモデルを見て成長していくところにあります。これまで、たとえば、ファースト・イヤー・セミナーなどの授業では、大学院生のTA（ティーチング・アシスタント）や上回生のSA（チューデント・アシスタント）が、演習形式の授業などに入り込むなどして、1年次生と顔を合やす機会があ

広大な敷地と比べると、新町キャンパスの手狭さは猫の額に喩えてもよいかもしれません。施設をそのままにして800人以上の学生を新たに受け入れることにより、いま新町キャンパスは超過密状態、落ち着ける居場所のないくらいに混雑ぶりです。とくに昼休みの食事風景を目にすると、緊急の対策が必要だと感じます。

求められる教育内容の再点検

社会学部では開設当初から全学に先駆けて、副専攻制度を採用し、5学科の主体性を損なうことなく、しかし、5学科が連携して教育内容を充実する方法を模索してきました。社会学科、社会福祉学科、メディア学科、産業関係学科、教育文化学科の五つの学科を擁する社会学部に入学した学生は、単にそれぞれの学科が提供するカリキュラムのみを履修するのではなく、各自の興味関心にあわせて他学科の科目を系統的に履修する、あるいは、各学科が提供する共通のテーマ、「国際社会」、「社会心理」、「ジェンダー」といった学問内容についても副専攻として履修することが可能です。このような新しい制度は、完成年度を終えたいま、情性で運営されるのではなく、適切な点検と評価が求められます。さらに、時代に変化に呼応して、カリキュラム改革も必要な部分が少なくありません。たとえば、英語でおこなわれる授業の数の増加、海外の大学や研究機関との連携の強化など、まもなく複数の学科で新しい動きが見られることになると思います。次々に新たな学部が新設されることは、同志社の存在感を社会に示す良い機会になりますが、完成した学部をさらに充実していく姿勢は、それ以上に大学にとっては重要な課題であると思われま

岩倉校地の古墳時代集落

岩倉忠在地遺跡の3世紀集落

大学歴史資料館准教授 若林 邦彦

同志社の岩倉校地では、1970年代以来の小規模な発掘調査で弥生時代後期末～古墳時代初頭の土器が出土し、その一帯は「岩倉忠在地遺跡」と名づけられてきた。2004年秋に同志社小学校建設に先立って同志社大学が試掘調査を行ったところ、少数ながら古墳時代初頭の土器がみつかり、2004年12月～2005年2月に校舎建設で遺跡が破壊される4800㎡の部分について、大学歴史資料館が発掘調査を行った。

調査をすすめると、弥生時代後期末～古墳時代初頭（3世紀前半）と考えられる、方形の竪穴住居8棟や約300もの柱穴群などがみつかった。また、住居を支えていた柱の跡が調査区の全面でみつき、広い範囲で住居が営まれたことがわかった。竪穴住居の中には、床面に粘土の塊が置かれた状態のものがあつた。おそらく土器・土製品の製作などの目的で住居内に粘土を蓄えていた跡だろう。その周囲半径20mの範囲からは、いくつもの土坑や溝から同じような白い粘土の塊が集中して出土した。集落の中の土器の専業生産が行われた場所が明らかにな

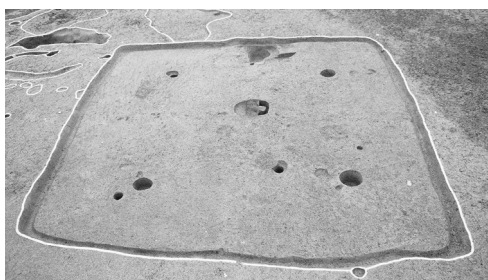
つたのである。

また、別の竪穴住居の内側には、木材や土が焼けたものが多く詰まっていた。屋根などの部分が火事などで焼け落ちて住居が埋まった跡だろう。焼けた土が屋根の木材の上に貼りついた状態が観察された。このことから、この住居は木材や茅葺・草葺などの上に粘土をぬった「土葺屋根」だったとも考えられる。さらに、住居域の北部に、長さ1.2～1.5m・幅0.7～0.8mの大きな穴が10基検出された。形や埋まり方などから土坑墓とよばれる素掘りの墓（土坑墓）だったと考えられる。

さらに、2008年8月～2009年5月には、同志社中学・高等学校の校舎建設のために、遺跡が破壊される約9000㎡の部分で、大学歴史資料館が発掘調査した。調査では、方形の竪穴住居が4～5棟検出された。さらに、住居の近くには掘立柱建物も検出された。それ以外にも多数の柱穴が検出されており、竪穴住居以外の形態の建物のあつたことが類推できる。また、住居跡の周囲には井戸などの施設がみつかり、溝や窪地

には多くの土器が捨てられている状況が明らかになった。これらの土器も大半が古墳時代初頭の所産と考えられる。これらの成果により、3世紀前半における岩倉忠在地遺跡の集落規模などが明らかになった。

小学校校舎部の調査と今回の調査成果をあわせると、約2～3ha程度の範囲にわたって住居や生活施設が点在していたものと考えられる。これまでの調査成果では、この範囲以上に集落が広がっている可能性は低い。また、出土した土器の時期をみると、見つかった住居群や生活遺構はすべて古墳時代初頭に限定できそうである。住居跡も何度も建て替えられた痕跡もない。つまり、短期間に形成された集落の状況をそのまま残した遺跡



古墳時代初頭の竪穴住居跡



溝に多数捨てられた3世紀の土器群

だと考えられる。こういった、村の状態をそのままわかる発掘調査例はあまりない。2度にわたる大規模調査によって、古墳時代初頭の典型的な集落の規模や構造を示す好例が明らかになったといえよう。また、これまでに岩倉盆地には古墳時代以前の村の跡はみつかっていない。今回の調査で、当遺跡が、古墳時代の始まるころ、つまり邪馬台国・卑弥呼の時代の岩倉盆地の人々の生活の中心だったことがわかってきた。

このように、岩倉校地内には岩倉盆地の歴史だけでなく、古墳時代の社会・文化を考える上で重要な遺跡がある。実際に発掘調査に際して行った現地説明会には岩倉地区や京都市内の人たちが多数見学に訪れ、学外からも高い関心を集めていることがわかった。一般市民のためにも貴重な文化財の上で、われわれ同志社の教育活動は行われているのである。

調査により遺跡の実態が明らかになったのは喜ばしいが、小学校や中・高校の校舎の建設ではその一部が壊れてしまったのも事実である。それでも土坑墓や竪穴住居の一部は工法変更などにより保存されることとなった。また、小学校の廊下部分には、検出された竪穴住居の様子がのぞきこめる施設も作られた。一般市民の関心にこたえるため遺跡の掲示板も設けられた。工事に先行する調査だけでなく、遺跡の存在価値を重視したさまざまな工夫を行うことが、重要ではないか。文化的・歴史的環境と共存し、京都の市民のコンセンサスを得ながら、場合によって付近住民の地域アイデンティティの支えを提供しながら同志社が生きていく道をさぐるということが重要だろう。

創部63年目、初優勝を掴んだ「総合力」

大学体育会ボクシング部監督 河村 秀明
大学入学センター入学課

はじめに

2009年6月28日。大学ボクシング部は第63回近畿学生ボクシングリーグ戦において悲願の初優勝を飾ることができた。今大会は新型インフルエンザによる日程変更や近畿大学ボクシング部員による不祥事などのトラブルが相次ぎ、選手たちは日々の調整やモチベーション維持に非常に苦労した。そのような状況でも決して「ブレる」ことなく最後までチームとしてまとまっていた。私はチームのまとまりを標題の「総合力」という言葉で学生に伝えてきたが、ひいき目にみても、同志社大学の「総合力」はリーグ加盟大学の中で群を抜いていた。そして、何よりもこの「総合力」がリーグ戦優勝の最大の要因であったと思う。

ボクシング部は1947年の創部で、これまで多くの卒業生の活躍と実績に支えられてきた。近畿学生ボクシングリーグ戦での最高成績は1部リーグ2位（6チーム中）であったが、ここ数年は5、6位と低迷状態が続いた。部員数は約20人で、そのうち高校からの経験者は5人である。部員の大半は大学入学

後にボクシングを始めるため、彼らとボクシング経験者をいかに融合させるかが本学ボクシング部の最大のテーマであり、この融合により生まれる力こそ「総合力」であると考えている。では、この「総合力」を生み出す方法は何か。今季のリーグ戦への取り組みを振り返って考えてみたい。

「総合力」を生み出した二つの要素

今回のリーグ戦を振り返ると、「総合力」を生み出したのは、①現場主義、②リーダーシップとフォロワーシップの2点に集約される。

①現場主義

私は大学卒業後コーチを務め、2007年に監督に就任した。現役、コーチ時代の経験を踏まえ、監督就任の際に決めた方針が「現場主義」である。つまり、監督がまず指示を出すのではなく、主将を中心とした選手たち自身が「何をしたいのか」「自分たちが部をどうしたいのか」を考え、そのための方針や計画を立てることである。当然、意見がまとまらず具体的なイメージが浮かばないといったケースも出てくるが、そういった



時にのみ私が主将にアドバイスを与えるようにした。そして決定事項を主将が私に説明する。選手が活動する現場の意見を部の方針に最大限反映することで、ボクシング経験の有無、多少にかかわらず「自分たちで部を運営していく」という意識が芽生えたように感じた。私は、彼らが決めた方針・計画どおりに活動できているかをチェックしながら、技術指導や対外試合の調整を行った。もし計画に無理があれば、再度現場の意見を集約し軌道修正する。部員20人の小さな組織だからこそ、計画から実行までをできる限りボトムアップで決定することができ、この

仕組みが「総合力」を生み出すための第一歩だったと言える。

②リーダーシップとフォロワーシップ

リーグ戦に優勝するために、主将以下4年次生がリーダーシップを発揮することは必須である。それに加えて、「総合力」を生み出すための重要な要素が「フォロワーシップ」である。フォロワーと

はリーダー以外の部員、すなわち1年次生から3年次生のことである。リーダーだけが努力する組織では、目標達成は困難である。レギュラー、控え選手、マネージャー、立場を問わず多くのフォロワーがリーダーの想いを汲み、練習に取り組む。例えば、積極的に声を出す、学年に関係なくアドバイスしあうなどフォロワーが自発的に活動することで、リーダーは自信を深め、部の運営にさらなる意欲を持つことができる。またフォロワー自身も「誰かがやつてくれる」といった他力本願ではなく、「自分がやる」という常に目標を意識する姿勢へと変化していく。彼らが自身の重要性を理解することで、低迷期に蔓延していた「結果はともかく、良い試合ができればよい」といった雰囲気が一掃され、一丸となって勝利にこだわる雰囲気へと変わっていった。このようにフォロワーの意識改革は「総合力」を高める大きな要素であったと言えるであろう。

おわりに

今回のリーグ戦初優勝で私自身も大きな感動を味わい、多くのことを学べた。粘り強くなればった選手たちに感謝したい。体育会で活動する以上、これからも結果が求められる。そのために「計画→実行→点検」を繰り返し、結果に至るまでのプロセスを考えることは重要な能力であり、また社会人として働く上でも必要な能力だと思う。卒業後、選手たちがこのことに気づき、ボクシング部での経験を生かして社会人として活躍してほしい。そのためにも、同志社大学ボクシング部が競技や部の運営を通じ社会人となる選手たちの「気づきの場」となるようこれからも努力していきたい。